

た水道施設について宣伝をさしていた。地形が扇状地性で自然傾斜しているため動力費は他より安くつくが、散村のため規模の割に利用者が少ないのが欠点とのことである。

砺波平野は役所さしまわりのバスで一周した。まわ高台から散居形態を見下してみた。屋敷森を配した家々が美々と散在し、全く教科書通りである。新しく家を建てる際は、現在でも離れて建るとのことで、散村をなした最初の要因が何であつたとしても、伝統の根強さには驚くべきものがある。後で土地の名士である助役さんの家を見せてもらったが、ノミ置もある広間をはじめとして、太く黒光りする大黒柱や巾ノ丸以上もある一枚板のなげしなど、昔の家は大変な貴族を備えていることがわかった。

庄川の端の料亭で川アユの御馳走になつた後、チューリップ栽培試験所に寄つた。富山県では裏作物としてチューリップ栽培がさかんで、外貨の獲得に大いに役立っている。たゞ球根を作るのが目的であるため、花が咲くとすぐ茎を残して花だけ切り取ってしまうそうで、何だかもつたいない気がする。

三日目は河岸段丘を見に常願寺川の上流へ向つた。段丘は大きく二段に分かれるが、赤松ヶ原塔岩台地のすぐ下にある粟栗野附近で、高さ100mほどの堆積段丘が見られるのは、ちよつとした驚異である。この砂礫よりなる段丘面は、上に登ってみると辺り一面赤土で、余々に畑が開かれつゝあつた。農家で水はひ飲ませてもらい、正午頃現地解散したが、その後立山へ出かけた者もあつた。

宇都宮 (昭和35年9月6日-9日)

昭和33年度生

朝9時52分の汽車に乗るのは夏休みですっかりナマツた体に少々キツかつたのですが、とにかく全真車中の人となりました。名にし負う式先生の巡検に大きな期待を持って上野を後にしたわけです。もちろん「まだ反響は夏休みだというのに」なんて口にする不心得者はいませんでした。(?)

宇都宮駅には式先生がお待ちでした。時刻は10時50分、そこで勇んで出発する前にすませねばならないことがありました。余っている時間はありませんから急がねばなりません。突然10数人のキリツと勇ましい、見方によつては異様な風体の女性達が入つて来たので食堂のおばさんはさぞ驚いた

ことでしょう。そのため注文品の教は間違えられてヤキモキさせられました。

景が用意された車まで県庁に向いました。挨拶のためです。車は土木関係のものとかで、定員はノ名、そこで普段はシヤベルやツルハシが乗る所（後でわかったのですが）に4人乗りました。オープン・カーに乗ったつもりになっている者もいたのですからいい気分ものです。本当は人が乗ってはいけない所なので景の方でもう一台乗用車を出してくれました。（私はついに一度も乗れず自家用車族の気分を味わえなかつたのは本当に残念です。）

さていよいよ本格的巡検の開始です。城址へ行つて宇都宮市の概観をしました。そこで地図と実際のを合わせることの難かしさを痛感したのは多分私一人ではなかつたらうと思います。続いて、埃さえたたなければまあ我儘のできる道を大谷石の採掘場へ向いました。大谷石は関東大震災と帝國ホテル（PRではありません。危のため）で名を売つたという建築材です。採掘場は暗く、機械の音はひどいし、上から水がにじんできたりして湿度100%に近いという状態で、働いている人達は大変だろうと思われました。

続いての目的地である赤坂の露頭に着いた時は曇りになっていて記憶します。運転手さんが県の職員であることが知らなかつたら、私達はいつ宿舎へ行けるのか心配がたつたでしょうが、5時間迄にはどうにかなると思えばまあ大丈夫でした。ここで見た七本桜、今市、鹿沼の各浮石層の色はとても彩やかでした。鹿沼の華やかな黄色、七本桜と今市の赤色を覗ただけで宇都宮へ来た甲斐はあつたと思ひました。しかし記憶とは当に合わないもの、今七本桜と今市は「これがこっち」と云えないでしょう。

夜の復習のスリリングなこと、一度は至極する価値があります。書き忘れていましたが私達は2、3人ずつ地形班とか地質班とかに別れて一応下調べはしていったのですが、現地はもちろし、この復習の時も「この土壌は？」等の質問にはインスタント知識をレボリ出すのに全くヘイコウしました。

次の日は四年生が4、5人見え、乗用車が更に一台ふえて都合三台発車場々として出発しました。が、いざ目的地に着いた頃から雨が降り始め、この付近の典型的な露頭がある湯美穴をノートに鉛筆を走らせても書けないという初めての至極をする位のドンシャブリになってしまいました。これには式先生といえども如何とも仕難く、「本日はこれまで」ということになりました。但し最後の日、日光で朝解散するのではなく一日フィールドワークをする、という私達にとってびっくりしてぼうーっとしてしまうような一ヶ条が付加されたのです。しかしこの日午後いつぱい宿舎に帰って愉しくゲーム、その他

で遊べたのですから、あるいは雨に感謝すべきなのかもしれません。

9月3日、雨はあがりました。してみると四年生のどなたかが雨降り女だという決論がでます。さてこの日は今まで使われずに足手まどいになつていたボーリング、ステッキが脚光を浴びました。ほとんどの着がこの時初めて使ったそれはなかなかの愛嬌着でした。偶然(でもないでしようが)鼻上からハンマーが落ちると気嫌よく入り、いくらカをいれても頭を獲にぶって全無いうことを聞かなかったりするのです。「先生、この色は黒褐灰緑黄色ですか?」なほ理解に苦しむ質問が出たりしました。わかきの層も見落してはならない科学的態度を養ったのは大収穫でしょう。そして一番の驚きは平野の地形の微妙さでした。この日も幾つかの露頭を見たり、かつての宿場町や河岸を見たりするのに自動車2台は大活躍してくれました。更に日光までドライブでき、一同、自動車と運転手さんに感謝しています。

翌9月10日、東照宮を覗いていない者があつたため朝ノ時間自由時間になりました。いろいろ覗たい所があり「残念、雨がザアザア降ればいいのに」と思われないでもありませんでした。ところがその気持が通じたわけでもないでしようが、バスに乗った頃から降り出しました。しかし少し水降車になつたので歩く日の予定は変更せずに“雨中の大行進”は開始されました。時間によれば3時間足らずだったでしょう。その周南拓農家で聞き込みをしたら、ついに例幣使街道に出ました。その時は少なからずホッとしました。足は靴の中を泳ぐし、ズボンの $\frac{2}{3}$ 以下はビショビショ、正しく二度としたくない恰好でした。その街道をちよつとはすれた所にすごい観物がありました。昭和24年の今市地震時の断層が何本かはつきり観られたのです、何しろはつきりした今市、鹿沼の浮石層があるのですからとてもきれいなものでした。

以上私達の巡検の幾分かをお報せしたつもりです。学研的互ことにはあまりに食弱ですからその方は三年生の誰かをつかまえてフィールド・ノートを借りて下さい。優秀なる(?)三年生のこと、質問すれば講義もするでしょう。

金 沢 (昭和35年10月10日-12日)

昭和34年農生

北陸は秋だった。刈入れも済んで広々と広がる富山平野を通り過ぎて車の金沢へ列車がすべりこみ、夜汽車をあかした我々をはき出した。10月10日、北陸に対する先入観は、お天気でくつが之されて明かるい空と、一日早く到着された渡辺先生と金沢大学の金崎先生に迎えられる。遠隔の地に来た